

## 残像抄(7)

## 『芳名録』より—オスワルド・シレン博士 その他—

大和文華館 館長 石澤正男

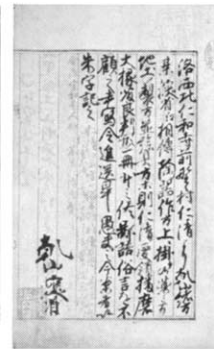
前号で御紹介した船越町時代の和綴の『芳名録』には188人の来訪者の御署名がありますが、同一人物が6人重複しておりますので、実数は182人となります。それらの方々はいずれも社会的に立派な地位をもたれる著名人ですが、美術関係の深い方々に限定してお名前だけを誌させていただきました。1954年11月13日に、当時の大阪市立美術館々々望月信成氏を中心とする「美術懇話会」の会員18名の方々の来訪があり、その中には弁護士で美術蒐集家として著名な田万清臣氏御夫妻のお名前が見えます。翌年の2月1日には三重県津市の川喜田壮太郎氏のお名前が見えます。川喜田氏の父君は本名久太郎(1871~1963)、半泥子・泥仏堂・無茶法師・莫迦耶盧主人その他の号を用いた方で、江戸時代以来の伊勢の素封家として江戸に木綿問屋の店をもち繁栄してきた名家の出自ですが、久太郎氏自身は実業界で活躍される傍ら作陶に没頭され、初期には楽窯を自邸内に、後には近郊に大登窯を築いて作陶三昧の生活と弟子の養成に尽力された方でした。作品は主として茶陶ですが、著書には『泥仏堂目録』、『乾山考』の他に自作品の図録三種があります。尾形乾山には非常に傾倒されていたらしく、

現在は大和文華館所蔵となっている乾山自筆の陶法伝書『陶工必用』全一冊と輪王寺門跡第四代公寛法親王(1697~1738)の三回忌に際し、法親王の号崇保院の頭文字“そ・う・ほ・う・い・ん(む)”の六字を和歌の句の頭につけて、乾山が「寔におそれみおそれみ かしこまり奉りて」献歌した六首の和歌懐紙の掛物一幅とを、当時の所有者故池田成彬翁(1867~1950)に譲渡して下さるよう懇願されたのでしたが、池田翁は遂に承諾されず、矢代前館長の希望にはあっさり応えて割愛されたというエピソードがあります。池田翁は三井財閥の重鎮として、日本財界の代表的人物の一人であり、三井を退かれた後は日銀総裁、近衛内閣の蔵相兼商工相を勤められ、その高潔な人格と該博な識見を認められて、1941年には樞密院顧問官に親任されました。これは破格の人事として当時の世人を驚かしたものでした。池田翁は晩年まで乾山自筆の陶法伝書『陶工必用』を身辺に置かれていたそうです。

ところで池田翁がなぜ半泥子翁の熱烈な『陶工必用』とそれに附随する「六首の和歌」の譲渡を承諾されなかったのかは、今となってはその真相は知るよしもありません。ただ乾山の名を名乗るために



陶工必用 尾形乾山



陶工必用(冒頭自序)

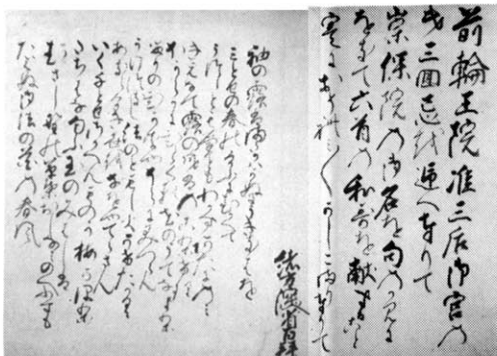
は、例えば第何代乾山というふうに襲名するためには、乾山自筆の『陶工必用』と「六首の和歌」を所持することが必要条件とされていた、ということが昔から伝えられていると聞いたことがあります。これは全く私の憶測ではありませんが、あれほど乾山に私淑されていた半泥子翁にとっては、『陶工必用』と「六首の和歌」の入手に強い執心を示されたことは容易に納得できます。然し一方所有者の池田翁にして見れば、或は半泥子翁に譲渡した場合、半泥子翁が乾山襲名に利用される惧れのあることを推察されて譲渡を断られたのではないかと想像します。『陶工必用』と「六首の和歌」が大和文華館の所有に帰したのは1945年で、池田成彬翁が長逝された前年のことでした。

船越町時代の和綴の芳名録は以上で一段落としておきますが、次の『芳名録』は大型の洋綴のもので、それが船越町時代の最後の一年間から大和文華館の開館後にわたっているばかりでなく、早い方は左開きで、第一頁に自1954年「有朋自遠方来 一 大和文華館」と三行に矢代前館長の筆で墨書されており、右開きの第一頁には、これ

は後から書かれたと思われませんが有朋自遠方来の論語の一節と大和文華館と二行に書かれております。内容を見れば左開きの方が先で10頁までが1954年11月から1960年9月までとなっています。

なぜこの『芳名録』が左開きになったかは最初の署名者を見れば、すぐ合点がゆきます。それは1954年11月19日、オスワルド・シレン博士と同行のジェームス・F・ケーヒル氏のお二人です。

オスワルド・シレン(Oswald Sirén 1879~1966)博士はスウェーデンの生んだ偉大な東洋美術史学者であります。始めは西洋美術史、特にルネサンス時代を専攻され、矢代前館長よりもかなり先輩ですが、フィレンツェに住んでおられたアメリカ人のバーナード・ベレンソン翁(Bernard Berenson 1865~1959)に師事され、『ジオットとその門弟達』と題した著書もありますが、後日本・中国に旅行したのが動機となり、1925年には『支那彫刻』全四巻を出版されたのを手始めに、1929~30年には『中国古代美術史』、1933年には『初期中国絵画史』全二巻(五百部限定版)、1934~35年には『中国絵画史』と矢継ぎ早に出版されました。シレン博士は1908年以来ストックホルム大学教授の地位にありながら、よくもこのよ



六首の和歌 尾形乾山



顔状 酒井抱一

うな大著述を発表されるものだと、だれしもその精力的な活動には驚歎の念を禁じえないものでした。シレン博士の結局一番代表的な著作は1956～58年にかけて発表された『中国絵画』全七巻を挙げるべきでありましょう。この時同行されたジェームズ・F・ケーヒル君は私とは1953年来の友人ですが、ニューヨークのメトロポリタン美術館極東美術部研究員とフルブライト研究生として日本に滞在中で、大先学のシレン博士のお伴をして船越町へ来訪されたのでした。ケーヒル君はミシガン大学出身で、元末明初の文人画の四大家の一人である呉鎮(1280～1354)の研究で博士課程にあったのですが、シレン博士との出会いがきっかけとなり、日本での留学を終えるとストックホルムに行き、請われてシレン博士の最後の著書『中国絵画』の仕上げのお手伝いをする事になったようです。同君は帰米後はメトロポリタン美術館には戻らず、ワシントンにある米国唯一の国立博物館機構スミソニアン・インスティテュションに属するフリーア美術館に勤務しました。その後パークレイにあるカリフォルニア大学の美術学部の教授に就任し、今ではもう中国絵画史専攻の学者としては国際的に見ても指導

者的役割を果たしている一人と認められるように成長されています。

この『芳名録』の署名者を見ますと、俄然横文字が目立つてくることです。シレン博士とケーヒル君の署名に続く頁には当時の駐日アメリカ大使エフィー・B・アリソン氏が次のような感想の言葉を添えて署名されています。「今日私が拝見させていただくものは、全く素人の、飼われている兎のような視野の狭い見地から申しあげても、非常な喜びであり、天啓でありました。」アリソン大使のお伴をしてきた三人の人々が、それぞれ大使のあとに感想を誌されています。その一人エレン・ブセティ女史は、この年、アメリカ合衆国教育委員会(通称フルブライト委員会)から奨学金をもらって来日した学生の一人でした。ミス・ブセティは竹内栖鳳(1864～1942)の研究を目的としていましたが、在日中に元ハーバード大学総長の令息セオドア・コナント君と結婚し、研究の題目も度々変わり、大部前から日本政府の美術教育行政の研究に専念しているようです。

(\*80-10-25)

季刊 美のたより No.53

昭和55年 11月13日

発行 大和文華館